爪はじき者と未発見の宝物
イーシャ・サーデサイによる再話

男はいつものように、町から最も離れている狭い未舗装の道の脇に座っていました。薄い土ぼこりの層が彼のまだらな足を覆い、周りには彼がこの世で自分のものと主張できるわずかな持ち物――変色したスプーン、売れ残りのパンの耳、使い古したわずかな糸――がありました。

この道の片隅も、ある意味では彼のものでした。今では、彼が座って眠っている地面にはくぼみができており、そして町外れで起こることを気にして、そこから彼を追い出すような人は誰もいませんでした。そうです、ここが町の爪はじき者が施しを乞いながら日々を過ごした場所であることは誰もが知っている事実でした。

この男は町に住んでいた時期があり、裕福な地域にも住んでいました。彼にはお金と地位があり、多くの豪華なパーティーにも出席していました。しかし、それは彼が人々から恐れられている病気にかかる前――長年、彼のご機嫌を取っていた地域社会に、突然、ぶしつけに避けられる前――のことでした。

今となっては、彼が自分自身に示せるものは、座っているこの小さな道と、集めた残飯やつまらぬ物だけでした。何年もこのような状態で、その間彼の状況は何も改善されませんでした。彼はたびたび飢え、その肉体は衰弱していきました。

男は近くの小枝を拾い上げて、ぼんやりとしながら土に円を描きました。２人連れが通り掛かり、ほとんど彼を見ることなく、数枚の銅貨を投げてよこしました。「ありがとう、ありがとう」と、自分にはいまだにとても不自然に感じられる卑屈な態度で、彼は言いました。

彼が言いながらふと見上げると、その2人連れが目に留まりました。彼らに見覚えがあると思いました――間違いなく、よく行っていたパーティーでその女性を見たことがありました。「どうしてこうなってしまったんだろう？」彼は絶望して考えました。彼は棒で形をなぞることに戻りました。彼の手足はどうしようもないほど重く感じ、まぶたが垂れ下がり始めました…

翌朝、人々の一団がその同じ道を歩いていました。最初、彼らはその男に気づきませんでした。長い年月を経て、彼は多かれ少なかれ周囲の環境に溶け込んでいました。しかしその時、1人の男が振り返り、そして見たものをもう一度見直しました。

「見て！」と、彼はその男を指さしながら仲間に言いました。「あの人…死んでる？」

彼らがその男のいる場所まで小走りで行くと、彼は脇を下にして動かずに横たわっていました。息をしているようには見えません。手が置かれた場所から 10 センチメートルくらいの地面には、小枝がありました。

やがて、当局が男の遺体を運び出し、周辺を片付けるために来ました。男が自分のために持っていたこまごました物を取り除くのは、すぐ終わりました。しかしその後、彼らはわずかに地面がくぼんでいる、彼が座っていた場所を見下ろしました。

「この男は感染症にかかっていた」と、1人が言いました。「そして、彼はここにもう何年も座っていた。どうして、この地面が清潔だと分かるのだ？」

「その通りだ」と、他の者が相づちを打ちました。「今となっては、病原菌は地中に浸透しているだろう！　ここの土を掘って焼いて、ここにあるものすべてに病気がないことを確認する必要がある」

それで、翌日、作業員たちはシャベルと鋤（すき）を持って来て、掘り始めました。1時間ほど作業をしていると――表層の土を取り除き、小さな溝を作るには十分な時間でした――大きなカチンという音がしました。それは、金属製のシャベルが何か硬いものに当たった音でした。恐らく、岩でしょうか？

作業員の1人が、よく見るために溝の中に飛び降りました。彼はシャベルで同じ場所をたたいてみました。またカチンと音がします。手で土を払い始めました。何かがキラキラ光っているのでは？　ちょっと止まって、見間違いではないと確かめようと、目をこすりました。いいえ、疑いの余地はありません。それは地中深くに埋もれていたごく小さなかけらでしたが、金属性の黄色に輝いています。彼は改めて先ほどよりも手早に土を払いのけ始めました。目の前に大きなぎざぎざの金塊が現れました。仲間たちが息をのむのが聞こえます。

すぐに、作業員たちは溝の幅を広げていきました。彼らは宝物を掘り起こす手伝いをしようと飛び込んでいきました。爪はじき者、病原菌、そもそもここに来た理由などのあらゆる考えは、彼らのマインドから消え去っていました。その最初の金塊に続いて、何百、何千もの金塊が発見されました。これは紛れもない金鉱で、四方八方に広がっていました。その中心点は、その気の毒な男が座っていた場所の真下にあるようでした。

「信じられるかい？」作業員の1人が数日後に語りました。彼はシャベルにもたれながら、仕事仲間たちとその現場を見渡していました。黄金を探し求めて、その道のほとんどは掘り起こされました。今では、そこは地下の迷路のようでした。土の山があちこちに散らばり、シャベルがカチン、カチン、カチンと鳴っているのに対抗して、男たちは大きな声で指示を出していました。「今の今まで、この町の爪はじき者は、たくさんの宝物の上に座って、施しを乞うていたのか」と、その男は頭を振りました。

ちょうどその時、そよ風が吹きました。風は、道の脇に忘れられ、置かれていた小さな枝を浮かび上がらせました。

© 2024 SYDA Foundation®.著作権所有。